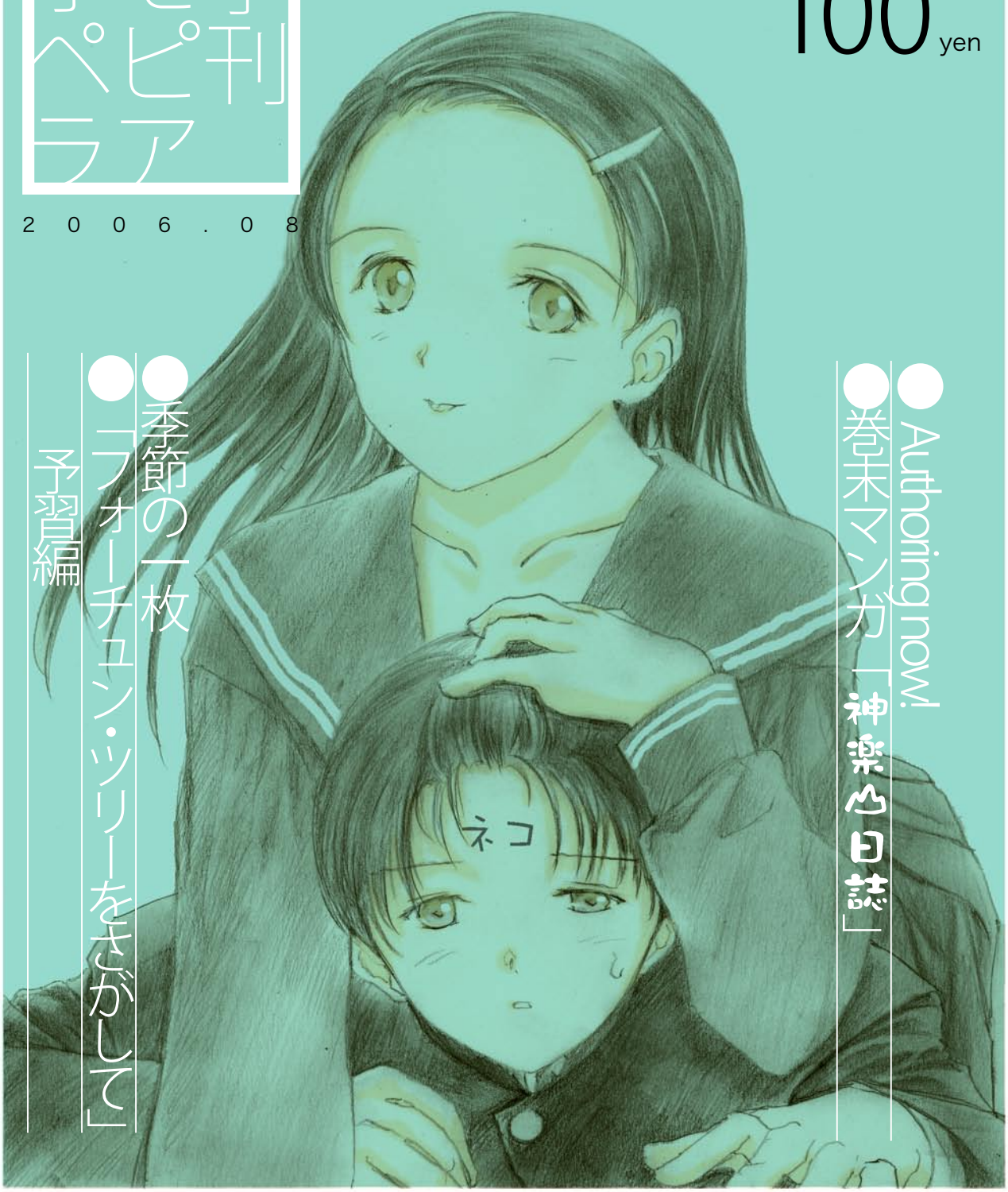
[sepia:opera]
SEASONAL

季刊セピオペラ

Vol.0

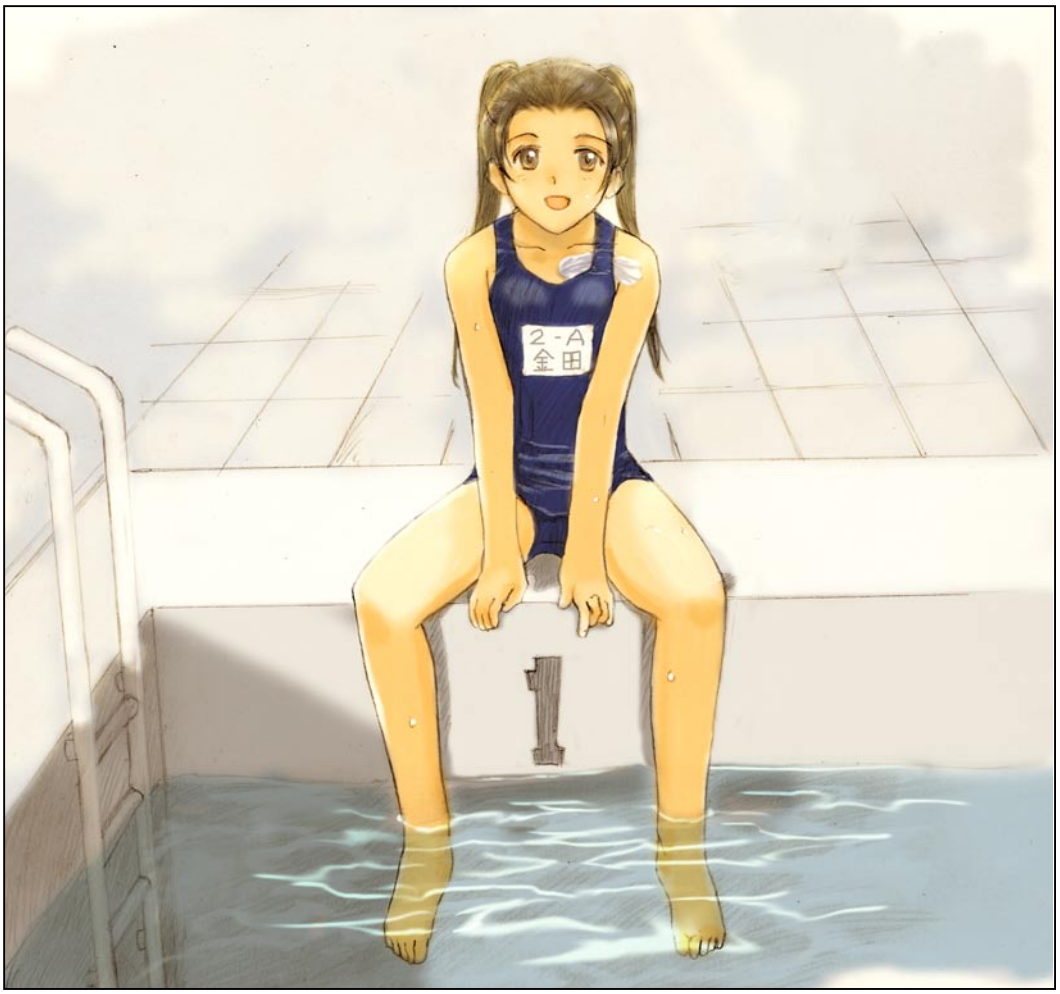
特別価格
100 yen

2006.08



●Authoring now!
●巻末マンガ「神楽山日誌」

●季節の一枚
●フォーチュン・ツリーをさがして」予習編



季節の一枚

2006年8月・晩夏

「前途遼遠」の帰結。

～ごあいさつ

■この体裁を取り皆様の目に触れるのは初めてのことと思います。「セピアオペラ」の加藤です。

■そも「セピアオペラ」とは？　サークルすらご存じない方もいらっしゃるかもしれません。旧名を「Elfish Company」と言いまして、こちらはそれなりに歴史がありました。――いやまあ、あるのは歴史だけでどれだけの作品を作っていたかとなるとお恥ずかしい限りで。かれこれ十年ほども活動していたのにもかかわらず、発行できた本の数はその年数と同じくらいではなかろうかと。

■「セピアオペラ」は'00年頃からサークル「Elfish Company」の「レーベル」として機能させてきました。「Elfish…」が元々ファンタジー系の画集やマンガを描く時に思いついた名称だったので、その後の作品として数が多くなった「現代モノ」「学校モノ」を著す為のサークルとしてはミスマッチ感が強くなりました。それをごまかす為の方便として「レーベル」という考え方で使い分けを始めたのです。サークルとしては従来通り「Elfish Co.」。作るものは、「セピアオペラ」として制作。特に新しい世紀に入ってからは「セピアオペラ」として作るものばかりで、しかも実際に刊行物の奥付や背表紙・ウラ表紙には「セピアオペラ」と書いてあるものですからweb等でも『「セピアオペラ』の本を買った。…」といった書かれ方をすることもしばしば。今後の方向性を考えても、「サークル」として「セピアオペラ」を全面に押し立てた方がよいかもしれない、との考えに至りました。

■サークル名を「セピアオペラ」としたのが昨年の秋頃でしたので、実際に即売会に参加したのは'06年の二月から、ですね。とりあえず「コミケ」には出たいのですが、運が尽きたのかサークル名を変えてから連続落選中です。きちんと名前を売る機会が乏しいまま、刊行物も昨年夏の「四堂の家」で一段落してしまいました。これまでは書き溜めた部分を編集しながら挿絵を描いてきたのですが（その割には時間が掛かりすぎている…）今後は「話を書きながら、絵を描いて、編集をして刊行」ということをしなければなりません。…と書くと、「個人サークルなんだから当たり前だろう」ということなのですが。遅筆の文字書きが挿絵も頑張るとなると、正直「新しいもの」をカタチにするまでにまた何年かかるか分かったものではないです。では無理にサークル参加を続けなければいいのでは？　という気もしますが、それでは「山のような在庫」はとうてい解消しないのです。で、サークル参加するとなると、既存の「うちの本を買って下さる方」にも「新しいモノ」を提示できなくてはならない。……

■「季報セピアオペラ」は、その経過をなるべく平易にとりまとめて本の体裁を取り、皆様により気軽に手にしてもらおう、という思いつきで生まれました。作る作るといって準備号ひとつにこれだけの日数をかけるのは普通じゃ考えられませんが。（読むにも買うにも）気楽なページ数で作って、少しでも多くの方にウチのサークルをより理解してもらえれば…。「見知らぬ誰か」の「得体の知れない小説」よりも読む気になれるんじゃないか、と。

イベントでの「一期一会」を少しでも大事にする為に。

二〇〇六年　夏　　加藤　寿生

[s e p i a : o p e r a]
S E A S O N A L

Authoring NOW!

Aug.2006
Vol.0

現在執筆中。

「四堂の家」の後続は一時中断。次回新作は「フォーチュン・ツリーをさがして（仮）」になるか。

「続き」か「別作品」か。偶然も作用した「新作」

「（仮）だの「～になるか。」だの、いきなりスポーツ新聞並にインチキくさい見出しになってしまうのですが、まあこうした部分も「途中の醍醐味」と思っていただければと思います。お気楽に!!…こほん。'05年の夏に刊行した「四堂の家」は「セピアオペラ」の看板コンテンツ、というか「それしか出てないじゃん」という感じのまさに一心同体の作品なのですが、次の刊行物はいったんこのシリーズを離れます。「四堂の家」の後は「邂逅の調（かいこうのしらべ）」というものを用意していて、話としてはひとつの山を越えた（つもり）のある「四堂の家」の各人物の後日談？　的な感じで書いています。これは「四堂の家」後書きにも書いたのですが、「諸葛亮亡き後の三国志」のようなもので、なかなかうまく作品としてまとめきれていない。いっそ「四堂の家」で終わらせた方が作品としてのまとまりはよいのではないか、という気すら加藤的にはしています。

「四堂の家」を編集しつつ、漠然と頭の中に思い浮かんでいたのは二つ。ひとつは、「家」のラストで出てくる旅行の中で起こった事件を扱った中編（か、どうかは書いてみないと分からない）。こちらは「姫巫女の祀（ひめみこのまつり）」などとタイトルをつけて漠然と頭の中で考えてました。実際ほんの少し書き始めてみたものの、まだ作品として醸成しきれない。そんな感覚です。

そんな中で、かつて知った人間が小説家としてデビューしたことを知って、何だか自分も居ても立ってもいられなくなり。「投稿用の作品を書いてみよう！」と思い立ちました。（本当に、思いついただけでよく行動します…。）

『庭シリーズ』と舞台の共有へ

そんな感じで「勢い」で始めたものなので、至る所に不備があります。すぐに行き詰まり感が出ました。ひとつは、人物や舞台の設定。これはストーリの組み立てとは直接的には大きく絡まないのですが、自分が話を書く上ではどうしてもある程度の醸成が必要。また一方で、それほど手間をかけてもしょうがないという感覚もありました。〆切が明にあるものなので、「急ぐ」ことを念頭に置いたのです。結果的には、どこにも投稿することなく時間は過ぎ去り、また作品のロジック的にも輻輳が始

まり、書き手自身が整合性を保ったりする為に苦心することになります（アホや…）。
それはともかく。ある程度急ぐ為に、自身の内にある『世界』を援用することを検討しはじめ、その中で、一番多く扱ってきた『庭シリーズ』を選択したのは自分にとっては自然な成り行きです。
これはともすれば「新鮮味のない焼き直し」になってしまいかねませんが、しかし一方で『庭シリーズ』でも主人公たち（雅や三四郎etc）が通う学校である『神楽山（かぐらやま）高校』についてはあまり語っていないこともあり、この二つはうまくやれれば『庭シリーズ』と『フォーチュン…』でお互いがお互いの世界を深め合うことができるのではないか、と。『ドラ○もん』に『パー○ン』の『パ○子こと星○スミレ』が登場するようなものです（…わざわざそこで藤子ワールドを引き合いに出すとは）。
世界が見えてくると作り出したキャラクターたちもそれぞれが動き出し始めて、加藤の手はいつになく動きを速めます。

別の視点から描かれる人物群像 そして明かされる事件――「かぐらやまのからす」

話を展開する上ではこれで十分なのですが、ここで重要なツールの提示が問題になりました。『フォーチュン…』では
「噂」
がストーリーの中でも非常に重要な因子となります。「うわさ」という曖昧な、しかし人々の好奇心や興味でひろがってゆく「不確実な情報」。……これ以上多くを語ってしまうと「話を読む必要すらない」ことになりかねませんから控えますが、その契機となる「エピソード」が必要になりました。
世界を『庭シリーズ』と共有して奥行きを持たせようとしたのだから、エピソードも『庭…』から持ってきた方が重なり合うだろう。
選定したのは、「旧日の縁（上）」の中でも簡単にしか語られておらず、『鹿島　静香』『有栖川　空』『四堂　匠』…といった『庭シリーズ』の登場人物の奥行きを出す為に用意したエピソード。また、『烏丸　三四郎』『沢村　伊万里』とが共通の話題として引き合いに出したエピソード。
「かぐらやまのからす」
という、ある種都市伝説めいた「噂」を、ここで使ってみようと思ったのです。
これは思いついた時には「いける」と思ったのですが、諸刃の剣となりました。
そもそもこの事件は発端そのものが極めて陰湿なもので「あまり読んで詳細を知りたくない」震いの真相にたどり着きます。どんなに考えても、事件の「被害者」は人生を踏みにじられかねない経験をし、「加害者」もまた人間の闇を覗かせるような心象を示すに違いない。ここにきて私自身の手が止まり始めます。書けば書くほど後味が、悪くなる。しかし一方で、その後味の悪さを払拭する為にも、おとぎ話じみた『フォーチュン・ツリー』が必要なのでは、と思わせることもできなくはない。
いくつか書き途中の段階で人の感想を聞くことができ、その際にもこのエピソード選定にはネガティブな印象を受けた、と耳にして、いよいよ私は停滞することになります。
ともあれ、このいわば「毒気」をどれだけ薄めつつ、このエピソードを使いこなせるか…というのがひとつ工夫のしどころになりました。
『鹿島　静香』『有栖川　空』が徐々に出張るようになったのは、いわば「毒を以て毒を制する」感じです（……え）。

本当は、忘れ去られた「宝探し」のエピソード

そんなこんなで後付の思いつきに引きずられそうな状況ですが、加藤的にはこの物語の骨子はあくまでもタイトルの通り。…のはず。
学校に隠された宝物を探す謎解きを主題にしているので、書き上げた後の質と量次第ではいっそざっくりとそれぞれのエピソードを切り離すのもありか、とさえ思っていたり。まさに途中経過であります。
そんな「途中経過」を人様に見せるのか、という気もしました。ただ、実際問題として、それをしないとサークルとしての活動状況をお見せすることができない。また、最終的にはカットされる内容でも、お見せすることで何かしらのフィードバックが期待できるのではないかと…。「セピアオペラ」を気にしてくださる方には、作品の経過もまた共にご覧いただければと。
ともあれ、こうした小説は面白いと思えてなんぼのもの。『庭シリーズ』と『フォーチュン・ツリーをさがして（仮）』はそれぞれを読むことでそれぞれに楽しめるものにしたいと思います。■

[sepia:opera]

「フォーチュン・ツリーをさがして」予習編

作・絵　加藤寿生

「フォーチュン・ツリーをさがして（仮）」は'05年の9月初頭から執筆を開始。'06年8月現在で第三章までの執筆が終わっている。ただし推敲はどの章も中途であり、各章にはその時その時のアイディアが雑多なまでに取り込まれていて、全体としての完成度はまだまだだと思う。

この準備号は「季報」のレイアウトとデザイン・方向感を試作しつつ確定させるのが目的の為、「連載」スタイルでの本文掲載は次号からとさせて頂きたい。

章立ては現時点では以下の構想である。

第一章「喪われた風景」
第二章「螺旋思考」
第三章「真相は　いつもせつなくて」
第四章「頭文字『M』の啓示」
第五章「そして、訪れた春」

……どのような春が訪れることになるのだろうか。それは作者にもまだ分かっていない。

第一章「喪われた風景」では物語の発端となる主人公・櫻井（さくらい）賢八（けんや）の心中描写から始まる。ここで「思慮が深く、ともすれば臆病な」心理を示し、その彼がどのような契機で「フォーチュン・ツリー」を知ることになったかを描いた。この時点で既に「最近急速に親しみを感じるようになった」同級生・長谷川　遥佳（はるか）とは互いにそれなりの意識をする間柄。今時の高校生ならば考えられもせぬ迂遠さだけれど。

今まで特に異性というものに何かを尽くそう賭けようとしたことのない淡泊な「中性的な少年」が、何かをしてやりたいとぼんやり思うようになった相手。

彼女が求めていたのは、ありふれたモノではなく。神楽山高校でも今や知る人ぞ知る「縁結びの樹」。またの名を「フォーチュン・ツリー」……などと、勝手に呼び始めたのは彼の姉・櫻井　八尋（やひろ）であるという。

まるで無関心だった神楽山周辺の小さな歴史と「噂」の茫漠な世界に、彼は足を踏み入れることになった。――それをただ面白がる、「近すぎる隣家」の妹分・金田（かなた）　晶（あきら）に「ただの好奇心で」絡まれながら。

その樹のことを調べている中、賢八はまた二人の別の少女に面識を得ることになる。この時点では、お互いが互いに影響を与えうることなど、想像もつかぬことだったが。

明敏な頭脳と精確な洞察を有する鹿島　静香と、その彼女の常に側にあり有形無形の示唆を与える有栖川　空。二人は全く別の「事件」を調べている最中だったが、そのことが期せずして賢八と遥佳との『接点』になるのだった。――それも、極めて、印象の悪いつながり方で。

次ページからは作者の中でイメージを固めつつある登場人物たちのラフスケッチを掲げつつ、作中でも語られぬ特徴や傾向、メイキングのウラ事情などを見てみよう。後半にはさらに新たな人物が増え、物語は深み…というより、冗長さを増してしまうのだが。

■

櫻井賢八（さくらいけんや）

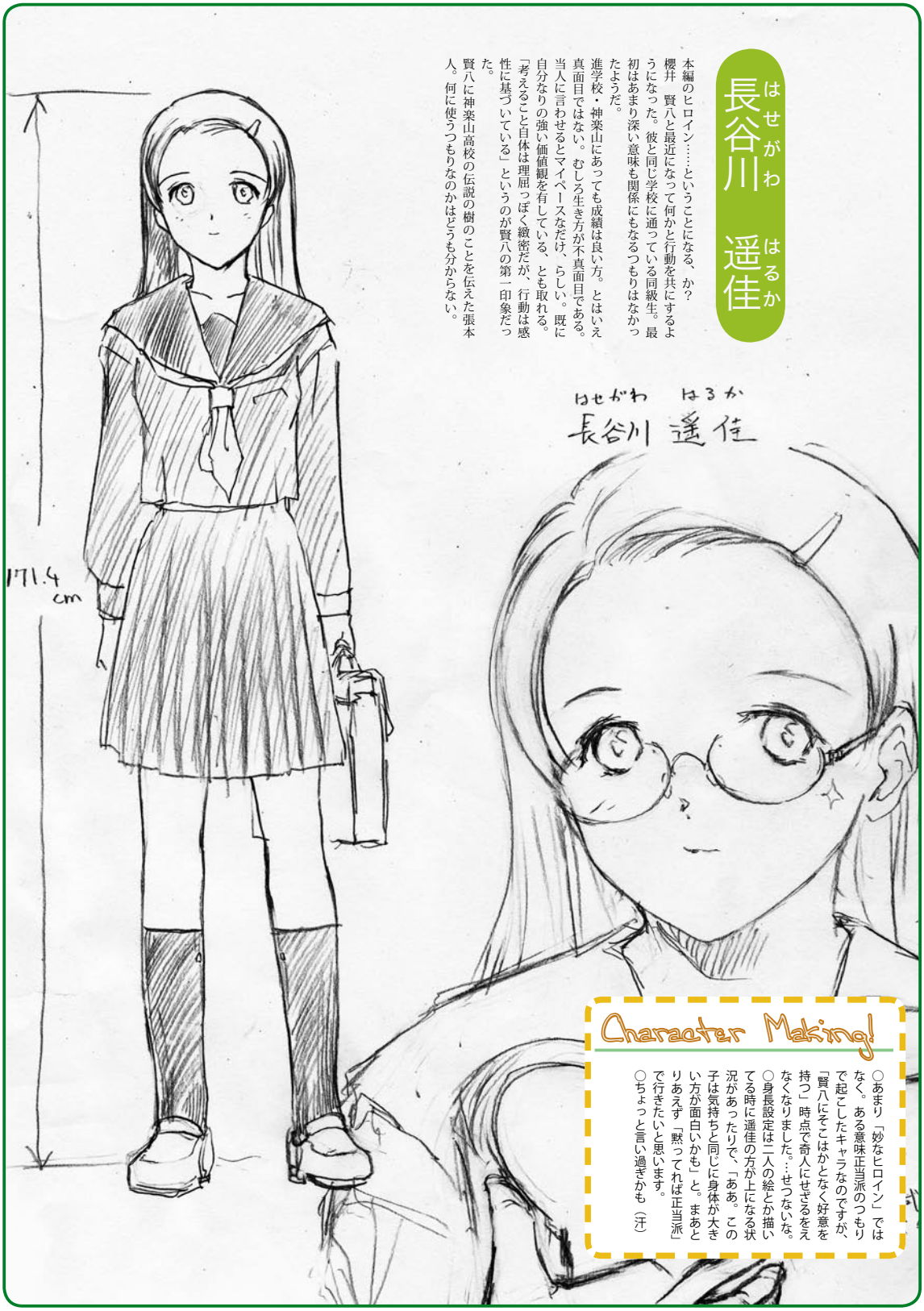
本編の主人公。
顔つきが幼く、小柄なことからボーイッシュな少女かと見まがう印象を有する。…が、当人はやたらと理屈っぽく、時としてそれが皮肉や辛らつな言葉になる。毒舌家（そしてそれを「櫻井節」と言って面白がる輩もいる）。
とくに『天敵』・歳の離れた姉である八尋（やひろ）に対して手厳しい。その長年の闘争のせいか防衛本能も発達しており、『会話や状況を先読みする』癖がある。能力と呼べるものでもないが、今やその『読み』はかなりのものだ。
最近同じ大学を目指していると知った遥佳との接点が多くなり、自身に訪れそうな春の予感をあれこれ分析している。やはり理屈っぽいのである。

Character Making!

○最初はつまらないことでも真面目にたくさん考える「思慮深く、皮肉屋で臆病な」少年でー、とか思って書き始めたのですが、書いてもつまらん上に話の勢いも削がれがちだったので途中から「いじられ系」で「かわいい」という要素を加えてみました。ただ、そういうキャラはあまり実感が伴わないので未だにしっくり来ない。もう少し「ツンデレ」少年、という属性で組み立て直してもよいかもしれない。書きながら、変わっていくもんです。

長谷川 遥佳（はせがわ はるか）

本編のヒロイン……ということになる、か？
櫻井 賢八と最近になって何かと行動を共にするようになった。彼と同じ学校に通っている同級生。最初はあまり深い意味も関係にもなるつもりはなかったようだ。
進学校・神楽山にあっても成績は良い方。とはいえ真面目ではない。むしろ生き方が不真面目である。当人に言わせるとマイペースなだけ、らしい。既に自分なりの強い価値観を有している、とも取れる。「考えること自体は理屈っぽく緻密だが、行動は感性に基づいている」というのが賢八の第一印象だった。
賢八に神楽山高校の伝説の樹のことを伝えた張本人。何に使うつもりなのかはどうも分からない。



Character Making!

○あまり「妙なヒロイン」ではなく。ある意味正当派のつもりで起こしたキャラなのですが、「賢八にそこはかとなく好意を持つ」時点で奇人にせざるをえなくなりました。…せつないな。
○身長設定は二人の絵とか描いてる時に遥佳の方が上になる状況があったりで、「ああ。この子は気持ちと同じに身体が大きい方が面白いかも」と。まあとりあえず「黙ってれば正当派」で行きたいと思います。
○ちょっと言い過ぎかも（汗）

金田 晶（かなた あきら）

本編のヒロイン2。ただ、当人の自覚はないだろう。賢八の家は長年床屋を営んでいるが、晶の家は彼女が生まれた後にその隣に建った。以来、賢八や賢八の姉・八尋共々兄妹のような付き合いがずっと続いている。

後から立てた家は二階部分が櫻井家と非常に近く、彼女はよく窓から窓へ飛んで移動する。自分は一人っ子のせいもあるのだろう。両親が会社勤めの共で働きであることから、櫻井家に上がり込んであまりにも自然に振る舞っていることも多い。賢八の級友には本当に妹だと思っている輩もいる。

そのせいもあって末っ子の気質が強く、利発で年上に甘えるのは上手だ。歳が近い賢八には何かと対抗意識が強く、背伸びをして彼の教科書やら書架の本やらを（勝手に）読みあさって成長してきた。なかなか手強く鋭い思考の主だが、気が短く「バカ」が我慢できない。——相手にも、自分にも。

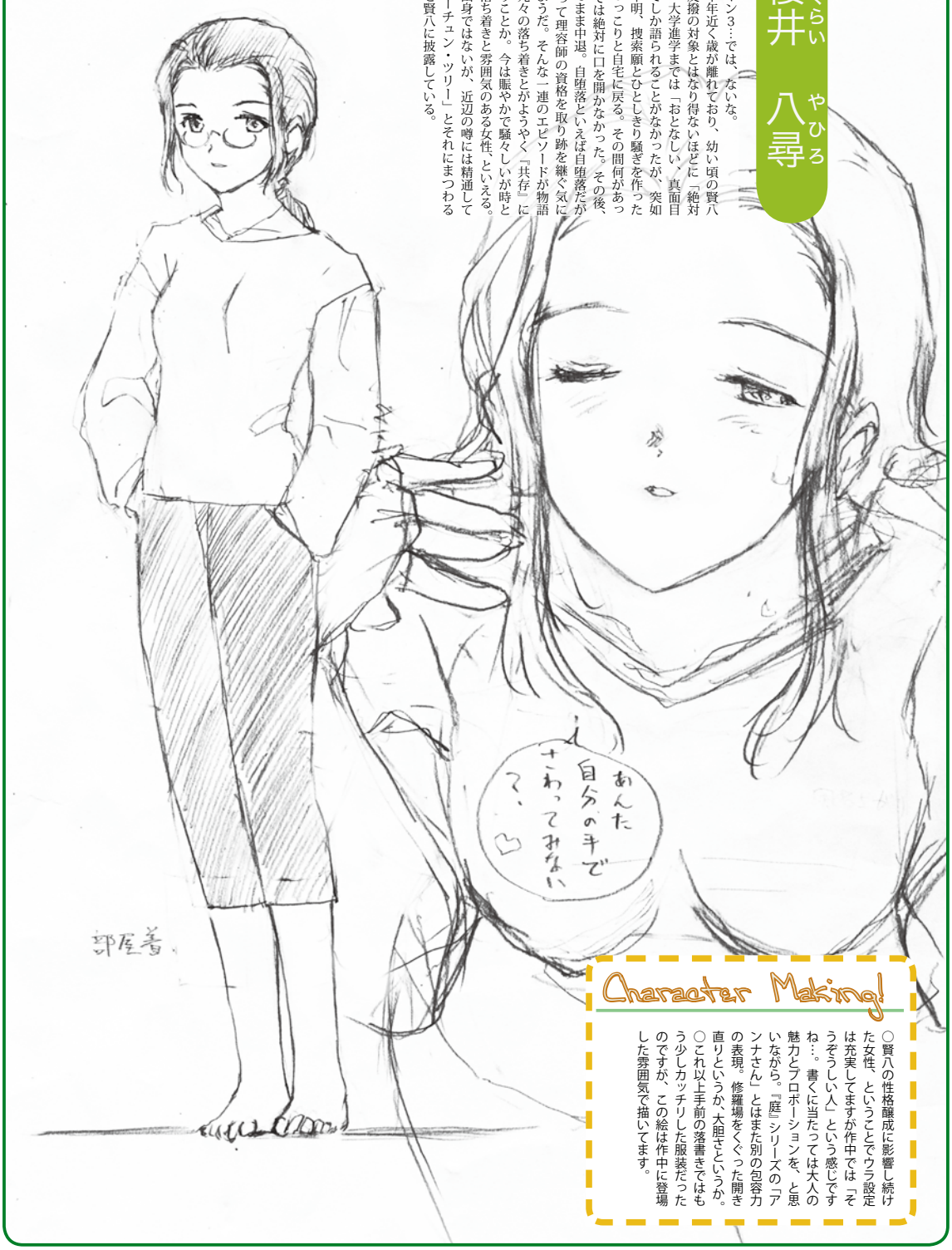
Character Making!

○こちらはツンツンでいこうかと。デレは彼女にとって「頭の悪い行為」なので使うとしたら下心があります。そのオンオフのメリハリが利きすぎていて、デレも役に立っていないのが面白いんじゃないかと。こうした属性論はあまり好きではないですが…。紙面が限られている中でキャラを語るには便利ね。

○作中でも表に出ない設定としては中学二年生であること。賢八が高校三年生なので、彼らは小学校以外は同じ学校に通ってない。

櫻井 八尋（さくらい やひろ）

本編のヒロイン3…では、ないな。賢八の姉。十年近く歳が離れており、幼い頃の賢八には理解や反撥の対象とはなり得ないほどに「絶対的」だった。大学進学までは「おとなしい、真面目な子」としてしか語られることがなかったが、突如失踪。行方不明、捜索願とひとしきり騒ぎを作ったがある日ひょっこりと自宅に戻る。その間何があったかについては絶対に口を開かなかった。その後、大学も休学のまま中退。自堕落といえば自堕落だが今は家に戻って理容師の資格を取り跡を継ぐ気になっているようだ。そんな一連のエピソードが物語る性格と、元々の落ち着きとがようやく『共存』に至ったということか。今は賑やかで騒々しいが時として大人の落ち着きと雰囲気のある女性、といえる。神楽山高校出身ではないが、近辺の噂には精通していた。「フォーチュン・ツリー」とそれにまつわるエピソードを賢八に披露している。



Character Making!

○賢八の性格醸成に影響し続けた女性、ということでウラ設定は充実してますが作中では「そうぞうしい人」という感じですね…。書くに当たっては大人の魅力とプロポーションを、と思いながら。『庭』シリーズの「アンナさん」とはまた別の包容力の表現。修羅場をくぐった開き直りというか、大胆さというか。
○これ以上手前の落書きではもう少しカッチリした服装だったのですが、この絵は作中に登場した雰囲気で描いてます。

鹿島（かしま） 静香（しずか）

神楽山高校ではこの時生徒会書記を務める少女。生徒たちの間で流行っている「掲示板」の管理責任者として主人公・賢八と接する。

極めて明敏な頭脳の主。体系的とは言えないが、様々な分野について造詣が深い。理知的・論理的であり、会話でもたいていは途中で（あるいは最初から）相手の意図を洞察し、受け答えをしている。彼女の醸し出す落ち着きは、そうした理解の早さに基づく「余裕」なのだろう。

「真面目で、几帳面」というのは事実だが、そうした形容のみではとても彼女を説明しえない。それはこの少女と接した人間全てが感じる不安でもある。今作で彼女はその「掲示板」を用いて忌まわしい事件に終止符を打とうとしているが…。

Character Making!

○『庭』シリーズからの出世頭（？）。私の中でも「よくもまあこれほどの大物になって…」と少々感慨深いです。

○当初は生徒会で「規律に何かとうるさい」というお約束キャラ程度のつもりが、「支配」「黒幕」「権力欲」という要素を加えてシリーズの中でも最悪クラスの力を持つに至ります。ただし、ものすごく純粋でもある。または、あろうとしている。そこが美徳でしょう。

○名前は「かしましい」から派生。姓と名を正反対の意味でまとめるのは基本かと。

有栖川 空（ありすがわ そら）

『鹿島　静香の親友』。一言で彼女を語るならばこれ以上のものはない。人物評にうるさい静香が唯一そうしたものとは無縁に接してきた。それは逆に、彼女については『評価とか信頼といった、そうした尺度は不要』ということかもしれない。

基本的に控え目で大人しく、内気で地味である。自分自身でもそれをよく分かっていて、多少なりともコンプレックスとなっている。ひたすらに外向的な静香と離れられないのは、そうした依存の意味合いもあるのかもしれない。几帳面さは静香以上のものがあり、整理整頓が緻密。

人付き合いが広いようでもなさそうだが、校内の噂話やニュースには精通している。自分自身の弱い部分を鍛えようとして剣道を続けているが、試合となると練習ですら勝てた試しがない。能力はあってもその使い方が得意ではないのだった。

そうしたこともあって、静香が彼女の「使い手」となる時、すさまじい効果を発揮する。

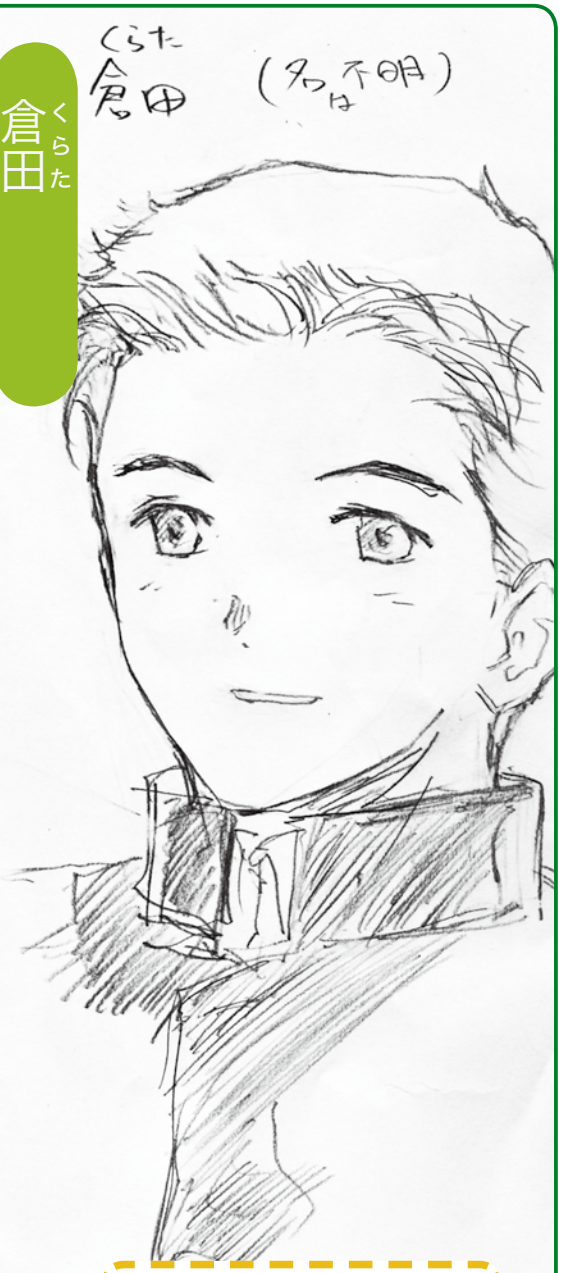
Character Making!

○どのような英雄にもそれを支える功臣あり。静香にとって空は能力的にはそうした立ち回り。空もまた、「自分にはないものを全て持っている」静香を必要としている。周囲がどう思うかは別にして、二人はそれで成り立っている。

○ただ、最初はそうした背景や思惑はなく、「そういやメガネの女の子居ないなあ」で描いてみた。『庭』シリーズではあまり存在感がないのもそのせいか。今となっては静香共々お気に入り黒幕キャラだ。

倉田（くらた）

賢八の級友。最近は受験勉強を放課後の図書室で続けていて、そこで賢八と会い、学校の噂の源について言及する。
明るく気さくな少年である。今のところ作中でもそれ以外の印象も、登場のしかたもしていない。実生活においては『よき友人』だろうが、いわゆる物語においては面白味に欠ける、とも言える。
そういった事情の為、名前が作中でも登場しない。後になって重要な役回りを演じるかもしれないので記憶しておいてはもらいたい。



Character Making!

○いわゆる「一般人」、通行人のようなエキストラ…。ただ人物全てが主役や脇役という訳にもいかないので、やはり地に足の付いたキャラは大事だと思う。図書室で勉強しているのは、家だと下の弟妹がうるさいからだとしている。
○神楽山高校の生徒としては極めて普通といえるだろう。
○普通になるように心がけました。

三木 直志（みき なおし）

今年の夏まで生徒会の会長を務めてきた。表情はいつも柔らかく、そこに穏やかな性格と知的な印象が加わる。実際に理性的で偏りのない判断をしてきた（神楽山の生徒は総じてその傾向が強いが）ただ、「どちらともつかぬ」判断に終始した、とも言えなくもない。

神楽山校内に流行った「掲示板」は誹謗中傷の寄せ集めになっていた為、それをなくそうとして鹿島静香に阻まれている。生徒多数の支持を得られなかった為であり、それを圧して信念を貫く、といった行動力は彼の領分ではなかった。

同級生の賢八からの話を聞き、鹿島　静香と巡り合わせることになる。それもまた彼には彼の考えがあってのことのようだ。

Character Making!

○これまた風采としては神楽山の一般的。特徴のない少年を少し賢い印象で描いてみたつもり。

○彼もまた脇役だけれども、自分の中でイメージを固める為にとりあえず描いてみた感じ。カタチにしてみるとしぐさとかも見えてくるし、それを作中で文字で表現もできる。ムダなことではないと思っています。

○倉田には名がないのに何故彼には!?　という話もありますが、まあ。なんとなくというか。

次号から掲載開始。
http://sepiaopera.info/
にも随時 up します。

■…という訳で、今回はここまで（準備の問題からここまでしか用意できませんでした）。部数やページ数に拘りますが、ページ数はB5サイズでもけっこうかさみそうなので、印刷に回したいなあ。でも部数が出るとは到底思えないのでコスト的にはとても悩ましい。いざやってみると難しいことだらけですが…でもまあ、毎回のイベントで何も新しいものがない、よりははるかにマシだろうと。

■本文もこの体裁（一行22文字で三段組み）でやろうと思ってます。このへんは今回の印刷でご意見あればお教え下さい。見やすくないと意味ないですし。

ネ　コ

表出の理由

●結局、何故「ネコ」なのかと！　以下待て次号!!　つづく

●後記

■なんとかカタチにしなきゃ！　ということで一心に編集しました。編修といっても実際には決まってないデザインをあれやこれや考えながらの作業だったので、レイアウト決めたりロゴ用意したり絵が欲しいなあとか思ったりで、きちんとやろうとするとすごく大変でした…。結局、いろいろ中途半端な感じが否めませんが、まあ、体裁はだいたいこれから先もこんな感じになるかと思います。
■それにしても自分の書き途中の小説についてあれやこれや解説を自分で入れているようで、なんか馬鹿馬鹿しくもあり気恥ずかしい内容です。たぶんこれだけ焦ってるからまだ続けてられるんであって、時間があったら絶対にかえってできないだろうな。そんな気がする。
■今まで描いた絵（主に「セピアオペラ」レーベルの挿絵とかカバー絵）を集めてまとめて一冊の本にしたいなあ…という思いも出てきました。フルカラー！とかで。いったいいくらになるのかと思うと、まだまだ企画段階ですが。でもコスト度外視で一度はやってみたいな、と。
■今日（8/26）など急に涼しくなってしまいましたね。明日はまたどうだか分からないですが。夏がこうして過ぎれば、もう秋で。最近は一年一年が過ぎるのがとても早い。本当に早いです。
■ JEF が少しでも調子が良くなりますように…。

2006.08.27　季報セピアオペラ Vol.0（準備号）
サークル：セピアオペラ
（コミティア 77: い 18a）
編集・デザイン：加藤　寿生
本文：加藤　寿生
イラスト：加藤　寿生
マンガ：加藤　寿生

admin@sepiaopera2.sakura.ne.jp
http://sepiaopera.info/